
ラスト・スペル～《最終呪文》～

蓮ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラスト・スペル 〈《最終呪文》〉

【Nコード】

N8145H

【作者名】

蓮ノ花

【あらすじ】

人々が災厄から身を守るために編み出したもの…それが魔法。百年に一度の災厄に苦しむ人々、そこに現れた一人の青年、たちのぼる暗雲。青年はどうして選ばれたのか…。処女作です。暖かい目で見ただけとうれしいです。いろいろ勉強しながら書いていたらいので、気軽に評価していただけると幸いです。

◆プロローグ

それは百年に一度訪れる災厄。その訪れと共に歴史は変わり、人々はそのたびに悲しみを乗り越え生きてきた。その災厄は

「ライド」と呼ばれ、空を覆う暗雲と共に現れると言い伝えられてきた。その姿は悪魔の様な姿だったり、馬に乗った騎士のような姿だったり、姿はなかったり…場所や年代によって違うものだ。ライドによって人類は傷を負い、傷を癒し、そしてまた傷を負うの繰り返しだった。人々は願った。傷を負うたびに願った。もう災厄が現れませんかようにと。しかし百年毎にライドは現れた。

数百年後、人々はライドに抗う術を見つけた。魔法の歴史の始まりである。人々は魔法によってライドを倒すまでいかなかったものの、進歩を遅らせたり、時には追い返したりすることもあった。だがそれまでだった。結局人々は傷付く歴史は繰り返されるのだった。

しかし最近、人々の間で噂されていることがある。あの「ライド」を倒す魔法が見つかった、と。だがそれを使うことが出来る人間がいないのだ、と。人々はその魔法を使う人間が現れる事を信じて、その魔法を敬意をもってこう呼んだ。

XXXラスト・スペルXXXXXXXXX《最終呪文》

◆第一話くウィリアムく（前書き）

初めまして！蓮ノ花です。プロローグについては世界観を感じていただければ幸いです。次は少しテンポのはやい感じで作ります。サット書いてとつとと本題に移っていききたいと思います（笑）それではどうぞ。

◆第一話くウィリアムく

『決めたー!! ウィリアムこれで二点目! チームエバンズ、駄目押しの三点目を叩き込みました!!』

マイクで拡張された実況の声が大きく会場に響く。エバンズのファンサポーターは自分の鼻^{ひいき}のチームのワンサイドゲームに歓喜し、こぶしをあげて声を張り上げた。

フロートボールと呼ばれるこの競技は無重力に設定された四角い箱の様なフィールドのなかで、浮いたボールを相手ゴールに入れるというスポーツ。チームエバンズはリーグトップを守り続ける強豪チームだ。そのエバンズのエース、ウィリアム。金髪金眼、程よく付いた筋肉、少しお調子者、そんな彼は今日もチームを勝利に導く：はずだった。

『おや…? なんだか雲行きが怪しくなっていましたね。』

ウィルはそんなはずはない、と空を見上げた。今日は一日晴天だったはずだ。しかし空は暗く厚い雲に覆われていた。これは降るかもしれない。ウィルがそう思ったときだった。轟く轟音、光る稲妻、人々の悲鳴。コートに雷が落ちたと気付いたのは横たわり、黒く煙りをあげるチームメイトを見つけたときだった。

「チャーリー!!!!」

ウィルがチームメイトに駆け寄り抱き起こし、大丈夫かと声をかけてやる。チャーリーは目に涙をため、弱々しく腕をあげると空を指差し、一言だけ呟いた。

「……悪魔……」

あくま…? ウィルはチャーリーが指差すほうへ顔を向けた。空には大きな悪魔がいた。恐ろしい顔で上空からウィルに指を突き立てていた。そこから光が自分のほうへ向かってくるのがわかった。

それがさっきの雷なのかはわからなかったが、一つだけ理解できた。

ああ…俺は死ぬのだ。光が自分を貫くのと同時にウィルの意識はとぎれた。

◆第二話く世界に落ちてく（前書き）

まだまだ楽しい部分には行けませんね…頑張って書いております。
よろしくお願いします。

◆第二話　世界に落ちて

「……オキロ…。」

…誰だ…？無機質な声にウィルは不機嫌そうに瞼を開いた。

「オキロ…。」

冗談じゃない。こっちは体が動かないんだ。ウィルは動かない指先を見るために首を捻って手の方へ目をやる。すると視界の端に黒い革製のブーツが映った。

「…オキロ…。」

どうやらこの人が俺に声をかけているようだ。目線だけを動かし、顔を確認する。ピエロの様な仮面を被っている。仮面のせいで素顔は確認できなかったが、体つきから男だということがわかった。男は涙が描かれた右目でウィルをじっと見つめているようだった。いったいこいつはなんなんだ…。ウィルが探るように男を見ている時だった。

「…起きなければ…シヌゾ…。」

気付いたときにはウィルは跳び起き、男から距離を取り身構えていた。悪寒…いやそんな表現では生温い、あれはまさしく殺気。人生で初めて感じた死の恐怖。それがウィルを動かしていた。

「…ヤレバ出来ル…。」

男はうまくいったとばかりに少しうれしそうに喋った。

「お前はいったいなんだっ!？」

殺気は無くなったが、いまだ自分の中にピンと張り詰めた緊張の糸を感じながらウィルは恐る恐る尋ねた。

「わたしハ『ジャック』…。時ヲ操り、世界ヲ回る…言わバ世界ノ管理人…ト言ったところカ。」

ジャックはさも当たり前、と言うように答えると、ゆっくりとウィルに近づいた。身構えながらウィルも後ずさる。

「怖がらなくテイイ…君ヲ迎えニキタ…。」

「悪いけど、何のことかさっぱりだ。他をあたってくれ。」

「君モ見たダロウ…悪魔ヲ…。」

ウィルの眉がぴくりと動いた。悪魔…。フロートボールのフィールドを燃やし、チャーリーを傷つけ、自分を殺した……。…までよ…。死んだ…。？誰が…。？それはもちろん自分だろう。では今の俺は…。？

「俺は…死んだ…のか？」

知っているのはこの男しかいない。ウィルはそう思った。

「ソレハ君次第でアリ私次第でモある。」

なるほど。つまり俺の返事次第でこいつは俺の命をどうこう出来るってことか。

「…条件はなんだ。」

ジャックはニヤリと笑うと、自らの仮面に手をかけ、ゆっくりと外した。仮面のしたからは少し髭をはやしたダンディーなオッサンが出て来て、ウィルは将来こんぐらい渋くなれたらいいな…などと少し思ってしまった。

「君にはあの悪魔を倒してもらいたい。」

声もこんなに渋かったのか…。そんなことを悠長に考えていたウィルは、聞こえた言葉を自分の中で数回繰り返した後、

「いや…無理っす。」

自分がどれだけ非力かは自分がよく知っている。ましてやあんな化け物…。

「君には力がある。君にしか…奴を倒すことは出来ない。」

まるで奴を知っているかのような口ぶりだ。これではますますこいつがきな臭くなってくる。

「あれはいったいなんだ…。」

ジャックは少し考えるようなそぶりを見せると、少し説明が必要だな…と言って話し出した。

「パラレルワールド…という物は知っているか？」

パラレルワールド…今現在と同じ時を刻む…異なった…今。ウィルは頷くと続きを促した。

「あれはそこからやってきた…生きた『災厄』だ。」

「生きた…災厄…？」

「そうだ。その世界では『ライド』と呼ばれている。」

「で…でも…なんでそれが…。」

ウィルは取り乱したような声をだし、ジャックに尋ねた。生きた災厄など、信じられる話ではなかった。

「詳しくはわからないが…おそらく空間の歪みだろう。そこで君の出番だ。私は空間の歪みを作り出した輩を見つけだす…。その間にライドのほうを潰して欲しい。」

潰すって…一体どうやっていうんだ。あの化け物に銃なんかの類が効くとは思えなかった。

「そういった事は此処の住人に聞くといい。誰でも知っている伝説だからな…。」

此処の…と言われても…。ウィルはぐると辺りを見回した。辺りはどこを見ても黒。闇のような空間だった。そういえばおかしい…なんでジャックだけははっきり見えるのか…。黒い服で身を包んでいるのにも関わらず、だ。もしかしたら人間じゃないのかも知れない。だとすると…。

「まだ…世界が見えないかね？」

思考を途中で遮られ、ウィルは少しむっとしながら答えた。

「この黒いのが世界だってんなら…見えてる。」

「フツ…君は面白いな。」

精一杯のいやみも鼻で返され、ウィルは反抗をやめた。

「そろそろ世界をみてもらおう。」

ジャックが手を一つ叩く。するとジャックの周りから世界が色づくように広がった。広い草原、遠くに見える針葉樹林。ウィルの見たことのない光景。

「んで…此処で何を…。」

ジャックへの質問だったのだが、そこにジャックは既にいなかった。

◆第三話　酒場とビンタ

活気づいた町並みを意味もなく眺めていた…。服装や建物なんかはもと居た世界とはまったく違うものだった。新しいものを目にするというのはなかなか楽しいものであるが、今のウィルには楽しむ余裕なんてなかった。とりあえず問題が山積みなのだ。腹が減ったということもあるが、まずは自分が何をすればいいのか認識することが先だ。そう思いなおすと、ウィルは情報の集まりそうな酒場へと足を伸ばすことにした。酒場には昼間だというのに人があふれかえり、特有の熱気でむせ返っていた。酒は好きだがこういった雰囲気は好きではない。が、そうも言われてられないので足を踏み入れる。しかし入ったとたんに人に肩をぶつけてしまった。そのまま何食わぬ顔で通り過ぎようとしたウィルは、肩を掴まれてしまい、ため息を吐いた。だから嫌いなんだ…。からまれる事を覚悟して振り向いたウィルは自分の肩を掴んだ人物を見て驚いた。女だった。褐色の肌にショートな黒髪。大きな瞳の中には、彼女の性分であろう活発さが見え隠れしていた。彼女の言葉が耳にとどかない。完全に見惚れてしまっていた。綺麗な女だな。先程から止まる事なく動き続ける彼女の唇もが、なんだか艶やかに見えてしまう。

「ちょっと！聞いているの！？」

ズイと顔を近づけられてようやく我に返った。

「あっ：わりっ：…こっち来て、まだ日がないんだ。」

こっち来て：なんて言ってしまったが、異世界から来ましたなんて言えるはずがない。言ったところで（こんな場所だし）酔っ払いの戯言なんかで終わってしまうに違いない。

「そういえば見ない顔ね。どこから来たの？」

「えっ：と…。東のほうとか：？」

「じゃあロンドリーの生まれ！？」

てきとうに答えていたので詳しい地名を言えるわけでもなく、ウィ

ルは、そうかなー、なんて曖昧に言ってみる。しかしその言葉に女は予想以上に食いついてきてこれまた困ってしまった。

「ユキ！ あんたの仲間が来たわよ！」

その言葉に反応した白い髪の女性は、言葉の意味を理解するやいなやウィルに走り寄って来て、ウィルを穴があくほど見つめた後、残念そうに眉尻を下げた。

「嘘つき…。」

ユキはそれだけ呟くと、もといたテーブルへと戻っていった。ウィルは嘘を見破られて少し動揺したが、さとられてはまずい。すぐさま平然の顔を作り、女へと向き直った。しかし見えたのは眼前に迫った平手で、その手は真っ直ぐ振り抜かれ、ウィルの頬を打ち抜いた。突然のことに怒ることも忘れ、はたかれた頬をさする。一体なんだかわからないまま、ウィルはもう一度女を見る。

「嘘…だったの…？」

女は信じられない、といった顔で凄んだ（そのせいでテーブル上のグラスがいくつか落ちて割れた。）。

「いやッごめんて！ 俺もよくわからないんだよ。」

「はあ…？ どーゆーことよ！」

事実、本音を言っていたウィルは、どう話していいかわからず、口をモゴモゴさせるだけで言葉は出なかった。このまま此処で話しても埒があかないと判断した女は、ウィルの腕をむんずと掴み酒場の外へ勢いよく飛び出した。

「まあいいわ。話はじつくりうちで聞く。ユキ！ 行くわよ！」

後ろから、食べかけであろう焼鳥をくわえながら着いてくるユキを確認した女は再びウィルの腕を掴み直すと、ずんずん先へ進んでいく。そして怒ったように呟くのだった。

「ユキを泣かしたなんて…許さないんだから。」

◆第四話く造船都市エバンズく

「あんた…それホントに言ってるの？」

やっぱり信じてもらえないか…。全て話した。本気で言ったのだが、コーヒーを険しい顔で睨ってるあたりをみると信じてもらえていないか不安なものだ。

「ちょっと来てくれる？…っと、やっぱりその前に自己紹介しよう。名前知らないままってのもあれだし。」

先程とは違う笑顔を見せながら、女は話し出した。

「あたしはサラ、サラリリック。そっちの白い髪のが天宮雪乃。あまみやゆきの

私たちはユキって呼んでるわ。」

ウィルがユキに視線を投げると、食べかけのパンをくわえたままヒョイツと片手をあげて応答した。細い体なのによく食べる子だ。

「俺はウィリアムダーリス。皆にはウィルって呼ばれてた。」

そう言うってからウィルははっと気付いた。皆はどうしているんだろうか。まだあの化け物がいたらおそらく…。どうやら早急に事態を把握する必要があるようだ。

「さて、自己紹介も終わったし、そろそろ行きましょ。」

「行くって…どこへ？」

サラはフフツと含み笑いをすると嬉しそうに答えた。

「私たちの第二の家よ。」

十くくくくくくくくくくく

カーンという甲高い音が休みなく連続的に聞こえてくる。此処の造船所はいつ来ても活気があるな。

キールIIアビエーターは久々に帰って来た故郷の造船所を満足そう

にみまわした。子供時代、此処はキールの遊び場みたいな物だった。といっても彼にとっては今も：だが。キールは10歳だ。まだ子供と言えるのだが、彼は自分を大人だ！と評価する。それは自分が立派な技師であることを認めてもらいたいからだ。実際、彼は齢10にして国内屈指の造船技師である。

「なー、オッチャン。コレもーちよつと安くなるだろ？」

「さっきから言ってるだろう。その値段でも買うやつは山ほどいるんだ。サア帰った帰った。」

シッシツと追いやられるがあれはどうしてもほしいパーツなのだ。あれがあれば旅も大分楽になるだろう。彼の言う旅とは、スペラーと呼ばれる特別な人間のための旅だ。この世界には「ライド」と呼ばれる生きた災厄がいる。それを倒すことの出来る可能性のある限られた人間：それがスペラーである。スペラーが使うのは通常の魔法とは違った特異な魔法である。それが発見されてから世界中でキール達のようなスペラーのために旅をする人間たちが大勢現れた。しかしまだその魔法を使うことが出来る人間がいないというのが現状だ。その魔法は「ラスト・スペル」と呼ばれ、この世界では誰もが知っている伝説になっている。いつか誰かが成し遂げてくれると生きた災厄を終わらせてくれると。しかしスペラーのための旅なのに：キールのチームにはスペラーがいない。スペラー以外の人間は揃っている。ただ単にスペラーがいないのだが、そのせいでキール達は便利屋として知られている。地方に出現した魔物の退治や、国際機関の手伝いなど、その幅は多岐にわたるが、キールは不満だ。自分の技術がライド討伐の為に使われない、それが歯痒かった。

――！？

遠くから聞き慣れた声がしてキールは自分が設計、製造をした飛行艇の方をみやる。見知った顔が二つ、飛行艇へ入っていく。しかし次の瞬間にはキールの顔が陰しくなり、飛行艇へと走り出していた。

「あいつ…。何者だ…！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8145h/>

ラスト・スペル～《最終呪文》～

2010年10月31日11時21分発行